

緒言

日本漢文資料楽書篇は、これで三輯目となる。省みれば、COEプログラム初年度に『藤原通憲資料集』をまとめて以来、中世日本漢文班は、毎年、資料集を刊行してきた。その業は、共に歩む若手研究者の欲するところに従って進められてきたが、結果、内容は、音楽文献資料の紹介、目録・索引、楽書研究と多岐に亘った。したがって、各輯、一書としてのまとまりに欠けるきらいはあるが、その年々の営みの大概がそこに描出されていると言つてよい。そうしてそれは倦むことなく継続されてきた。もちろん、その間には病に倒れる者もあり、研究から遠ざかる者、新たに加わる者もあったが、とにかく続けられてきた。その原動力は那边にあつたか。

第一に挙げられるのは、楽書が内包する文学的魅力ではなかつたらうか。そこには、歌人が筆ならぬ楽器を携えて多く登場し、鴨長明に肩を並べる数奇法師が姿を見せる。そうして、逸話の一人はいわゆる説話と変わらないおもしろさを包含しているのである。それが私たちを突き動かす。長明は『発心集』に、「夜昼、笛を吹くよる外の事なし」という永秀法師の心に対して、「かやうならん心は、何につけてかは深き罪も侍らん」(巻六・七)と評し、また、「此の世の事思ひすてむ事も、数奇はことにたよりとなりぬべし」(同・八)と述べる。「勤めは功と志とによる業なれば、必ずしもこれをあだなりと思ふべきにあらず。中にも、数奇と云ふは、人の交はりを好まず、身のしづめるをも愁へず、花の咲き散るをあはれみ、月の出入を思ふに付けて、常に心を澄まして、世の濁りにしまぬを事とすれば、おのづから生滅のことわりも顕はれ、名利の余執つきぬべし。これ、出離解脱の門出に待るべし」(同・九)とも言っている。数奇の心は仏教的な隠逸の思想と通じ、音楽を挙げることは仏道に通じると言う「仏樂一如」の心は、大神基政が『龍鳴抄』の跋文に、「管絃にのみならず心は、すいたるものすべき事なり。すきものは慈悲あり。つねにももの哀なる也。あけくれ心をすまし、とこしなひに法会誦經にまじる。ほとけの三十二相をほめたてまつるに、音楽をぐし、讚歎歌詠し奉るに、五音のしらべをそへたてまつる。花供に奏樂をし、散花に律呂をしらぶ。かやうなればちごくなしとはいふなり」と言うのに通じるから、長明研究者はひとえに樂書を縦覧しないわけにはいかない。

第二には義憤であろうか。明治よりこの方、樂書、音楽文献類は、歴史資料としてあまりにも軽視されてきた。明治期の学制改革以来、それまで学問と共にあつた音楽の扱いは変化し、美学の方へ組み入れられた。と同時に、史料的价值を充分活用されずに来た。しかし、たとえば熊沢蕃山が儒学の研究の根幹に孔子の礼樂思想を組み入れていたように、雅樂と道德は本来不即不離の関係にあつて、江戸の式樂として用いられてきた能樂は、今でも金沢の地においては幼少時の情操を養うのに用いられているように、音楽の持つもう一つのエネルギーが

活用されている。音楽には人を導く力がある。それを教育に活用しなくなつてどれくらいが経つだろうか。つい半世紀前まで、私たちは、小学唱歌等の歌詞によつて年中行事を知り、季節感の表現を知り、あるいは校歌や地方色豊かな歌謡によつて地域を知つてきた。ビートルズを音楽教育に取り入れてはいけないなどとは言わない。しかし、そうした新しさを取り入れる一方で、どれだけのものが捨てられたかである。美しい日本が忘れ去られたかである。音楽は文化である。

第三に、読者の増加がある。毎年、確実に本輯の需要が増した。それが、どれだけ私たちを励ましたか知れない。且つは、若い研究者に使命感も生れた。利用していただいていた資料集である。そろそろ、その不備に対する読者の要望、不満も聞こえてきた。それに真摯に耳を傾けつつ、これからも、事にあたつていきたい。

本輯においては、『雅楽資料集』に、新たに宋芳松氏の『韓国古代音楽史研究』の翻訳の一部と東儀鐵笛の日本音楽史研究草稿の翻刻が加わつた。韓国音楽史と近代日本音楽史学の先駆者の営為は、多くの人たちに知られるべきである。その大部分は次輯ということになるが、期待していただきたい。索引については完全ではないが、それでも指針にはなりえよう。今は、とにかく走り続けなければならない。作業の総まとめ、反省は、このプログラム終了を期して開始するつもりである。

さて、『声明資料集』については、そのほとんどを新井弘順師の四座講式の研究の再録に宛てた。再録とは言つても、それは長い間研究者の目に触れないでいたものであり、今回改訂を加えていただいたから、講式研究の現在に大きく寄与するものと自負している。本プログラム最終年のシンポジウムを見据えての企画でもあるから、是非ご一読いただきたいと願うものである。

中世日本漢文班主任 磯 水絵

平成二十年三月吉日

緒言 磯 水絵 1

狛系楽書群の研究

『教訓抄』の研究

《論考》『教訓抄』の古写本について 神田 邦彦 1

宮内庁書陵部蔵完本『教訓抄』翻刻(二) 卷四、五、六、七 教訓抄研究会編 15

曼殊院門跡蔵本『教訓抄』翻刻 卷七 教訓抄研究会編 99

『教訓抄』注釈ノート

序 五月女 肇志 118

春鶯轉 小山 聡子 124

太平楽 櫻井 利佳 148

〔春日楽書〕の研究

春日大社蔵〔高麗曲〕翻刻 櫻井 利佳 159

東儀鉄笛の研究

研究史における『日本音楽史考』 福島 和夫 179

《論考》東儀鉄笛著『日本音楽史考』について 滝沢 友子 189

『日本音楽史考』翻刻(一) 北島 剛樹、田代 幸子、田中 仁、宮地 彩、滝沢 友子 213

第四期鎌倉時代の音楽 二 「朝典楽継承真相(第一)」

平成二十年度シンポジウムにむけて

宋芳松著『韓国古代音楽史研究』（第一編）翻訳……………大嶋 彩子……………(77)

資料篇

国書刊行会本『明月記』音楽記事年表 新訂増補……………五月女 肇志……………(45)

図書寮叢刊本『玉葉』音楽記事年表(二)……………櫻井 利佳……………(35)

日本古典全集『體源鈔』 人名索引稿……………二松学舎大学磯ゼミナール……………(1)

執筆者・協力者・協力機関一覧・編集後記

二松学舎大学COEプログラム中世日本漢文班 編